

発行所(郵便番号100)
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸の内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447
編集責任者 高須 裕三
印刷所 関東図書株式会社
定価150円(年間購読料貳千円)
1976年11月25日発行
第8巻 第11号
(毎月1回25日発行)
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 8 No. 11

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

福祉社会の流通・生協視察調査団特集

報告と御礼

A Report and Words of Thanks

理事 日本大学教授 内藤 英憲

Prof. Hidenori Naito

(視察団コーディネーター)

今回の視察旅行は、研究所としては第3回目の企画であり、慣れてきたというか、視察の順序、時間の使い方等に無駄がなく、万事効果的に進捗したということはいえよう。また視察内容も単なる生協紹介といった初歩的なものでなく、流通業界における消費協同組合運動のウエイトの現状分析や将来予想など、次元の高いものであった。したがって、見学だけでなくレクチャーや討論の時間が多かったのも今回の特色である。単に生協運動だけでなく、いわゆるオーディナリーチェーンのNKや、バイインググループのイキャやエデカ等、消費者運動に並行する有力諸組織の訪問など、広い視野から生協運動をみたことも、非常に有効であったのではあるまいか。

それにつけても、先方の受入れ態勢が例の協同組合精神で大へん好意的であったことも、あらためて印象づけられる。とくにKF Rundbelvi氏、FDB エリクセン氏、FNCC シャルボウ氏、コーパラチブ・ユニオン、ギャラット氏、ICA オールマン氏、大参氏等のいつもながらの温かい受入れには感激した。こういう視察旅行は時間が制約されているだけに、先方の準備にいささかの遅滞でもあると、その成果は半減するものであるが、今回はこの点でもまず満足すべき結果ではなかったかと自分では思っている。

また、もちろんスウェディッシュ・インスティ

テュートの緻密なスケジュール作成と、通訳派遣等の経済的援助や滞瑞中の菊池先生、永山先生の御協力にも感謝しなければならない。プログラムはインスティテュートのアーレフェルド氏およびポールマーク女史によって組まれたものであり、またヒルデマン氏、ルンスケ氏の関与するところでもあった。これらの方々には直接接する機会がなかったが、視察団のためにアレンジの作業をして下さったわけで、ここに深甚なる謝意を表したい。

背後から視察団を応援していただいたの方々として、更に在日スウェーデン大使館のフリッツオン氏、在スウェーデン日本大使館の松下氏、在デンマーク日本大使館の武田氏、東海大学ヨーロッパセンターの服部氏夫妻等の御助力も忘れることはできない。これらの方々にも厚く御礼申上げる

No.11 目次

福祉社会の流通・生協視察調査団特集

報告と御礼	内藤 英憲	1
視察・調査報告	福田 雅	2
ご参加の方々のご寄稿	大橋隆憲氏	10
	近藤義彦氏	10
	中村 婚氏	11
	樋口久雄氏	12

次第である。

今回の通訳は、全て全面的かあるいはその幾分かが奉仕的な犠牲によるものである。つまり、事務的な雇用関係でなくやっていた方々ばかりであるが、にもかかわらずストックホルムの高橋氏、コペンハーゲンの福居氏、ハンブルグ東レの岡島氏、パリの河野氏等全ての方々はいずれも好評であり、私も大変嬉しく思っているばかりでなく、これら諸氏への感謝の気持で一ぱいである。同じ意味で交通公社の三堀氏にはとくに謝意を表したい。同氏は円熟のエスコートとして、まことに手際よく団の行動を導いてくれたばかりでなく、通訳としてもまた望外の仕事をさせていただいたからである。われわれが昨年に引きつづき、今年も同氏をエスコートとして得たことは幸せであったといえよう。

そのうえ、団員各位が、高橋先生、大橋先生をはじめ、人生老練の方々が多く、また樋口部長以

下農協関係の方々がよくまとまっていて、旅行中ありがたいな団員間のトラブルの類が全くなく、終始和気あいあいの空気の中で過せたのも何よりのことであった。

最後にサブリーダーとしての福田先生の努力を高く評価したい。今回の団の運営がスムーズに行われたのも、ひとえに福田先生の出発前からの周到な連絡と出発後の迅速適確な手腕と判断によるところが多いからである。同先生にもここに深く謝意を表する。

以上、仲間うちの自讃に終わるようではあるが、数度にわたる私の視察団の経験によれば、今回は、総じて非常に成功した視察であったと思う。しかしながらこれは、基本的には西村所長、高須先生をはじめスウェーデン社会研究所の積年のアクティブな活動がしからしめたものであり、所長をはじめ研究所御一同にも改めて御礼を申しあげる次第である。

「福祉社会の流通・生協視察調査団」報告

A Report of "The Distributive Trade & Consumer Co-operative Study Group"

研究員 日本大学講師 福田 雅 一
Lecturer Masakazu Fukuda

(1) 視察調査団の概要

当研究所は、昨年に引きつづき第3回目の「福祉社会の流通・生協視察調査団」を編成し、日本交通公社の協力をえて、去る8月15日から15日間、スウェーデン、デンマーク、西ドイツ、フランス、イギリスの各国へ派遣した。今回は、ヨーロッパの流通業界全体の動向と、そのなかにおける生協運動の実情調査を主な目的としていたが、農業関係、福祉関係、建築関係などについても実地調査をするという、かなり欲張ったものであった。幸い、関係者の方々のご支援、ご協力により、所期の目的を果たし、8月29日、全員無事に帰国することができた。

参加メンバーは次のとおりである。(敬称略、順不同)

内藤 英憲 (コーディネーター)
日本大学教授、当研究所理事
高橋 正雄 東北学院大学教授
大橋 隆憲 日本福祉大学教授
大橋 満子 京都府立盲学校教諭
大野 勝也 明治大学助教授

樋口 久雄 全国農業協同組合連合会 生活部長
久保 和俊 全国農業協同組合連合会 電器・家具課長
近藤 義彦 岩手県経済農業協同組合連合会生活課長
山田 長治 宮城県経済農業協同組合連合会総務部部付
大関 博 群馬県経済農業協同組合連合会生活部長
斎藤 仁 群馬県経済農業協同組合連合会西部支所支所長
佐藤 正武 福岡県購買販売農業協同組合連合会 生活資材部長
岩切 浩 宮崎県経済農業協同組合連合会 生活部長
小室 静 鹿児島県経済農業協同組合連合会 生活部長
森 正一 トヨタ生活協同組合 組合長
山田 稲造 茨城県勤労者生活協同組合 常務理事
中村 婚 (株) 産業科学研究所 取締役社長
三堀 博造 日本交通公社 添乗員
内藤 英二 日本大学経済学部
福田 雅一 日本大学講師当研究所研究員

合計20名

コーディネーターの内藤教授は、ご自身の研究も兼ねて、視察調査団より一足先きに渡欧され、1カ月余にわたって各地を回られた際に今回の視察先をすべて訪問され、事前の打合わせをしておい

ていただいた。今回の視察旅行が効率的に行なわれたのは、ひとえに同教授のご努力に負うものといわなければならない。

参加メンバーはいずれもそれぞれの分野で著名な方々ばかりであっただけに、各視察先でのディスカッションではいろいろな角度からの議論が行なわれ、非常に有意義であった。日程の関係で、朝7時食事、7時半出発というハードなスケジュールが何日も続いたにもかかわらず、遅刻する方は1人もなく、その意味では全員優等生（三堀氏が他の添乗員に話していた表現）であったといえる。ホテル帰着は早くて夕方5時、夜8時を過ぎることもあったが、最年長の高橋教授はそれから教え子の訪問を受けられることがしばしばあり、まさに超人的な活躍をされた。高橋教授夫人は紅一点として、視察先の応接者が女性の場合には第一線に出て活躍され、また各視察先の講師に“Ladies and Gentlemen”といわせるためにも貴重な存在であった。全農の方々には樋口氏、久保氏を中心によくまとまっておられ、その他の方々もまるで旧知の間柄のようによく打ち解けて、和気合々のうちに楽しく旅行を続けることができた。

添乗員の三堀氏は、昨年の視察調査団で好評を博した方で、今年は特に指名してお願いしただけあって、航空機、ホテル、バスなどの手配は申すに及ばず、コペンハーゲンのFDBやマンチェスターのCo-operative Unionでは通訳の労もとっていただき、また個人的なことでお世話になることも数多くあった。

われわれのために常に最善を尽くしていただいた三堀氏にこの誌面を借りて、感謝の意を表したい。

今回の視察旅行が数多くの成果をあげたのは、何とんでも外国側のきわめて好意的な受入れ態勢があったからである。各地の協同組合はいうにおよばず、どこへ行っても暖かく迎えられる、各部門の最高責任者の方がたと親しく話合うことができた。異郷の地で親切にされるといことは、身に沁みて嬉しいものである。このような厚遇を受けた背景には、全農、日生協、首都圏生協連、家の光、あるいはスウェーデン社会研究所の幹部の方がたが過去長年にわたって各国の関係先との間に培かってこられた友好関係があるわけで、これら諸先輩にも感謝しなければならない。

さらに、視察先の関係で何班かに分けなければ

ならなかったストックホルムにおいて、コーディネーターの補佐をしていただいた菊池幸子先生と永山泰彦先生、奉仕的に通訳を引き受けていただいたコペンハーゲンの福居誠二氏（コペンハーゲン大学留学生）、ハンブルグの岡島三代蔵氏（東レ欧州事務所主任部員）、パリの河野善彦氏（海外経済協力基金、パリ大学留学生）、ロンドンの大参平八郎氏（ICA金融部長、農林中金から出向）、あるいはまた視察調査団派遣にお骨折りいただいた在日スウェーデン大使館のFritzson氏とAnkarcrona氏、高須裕三先生をはじめとするスウェーデン社会研究所のスタッフの方がたなど、今回の視察調査団のためにご尽力いただいた方は数多い。ここに記して謝意を表する次第である。

(2) ストックホルム

羽田を発って16時間、ストックホルムのArlanda空港に着いたとき、現地時間は8月15日の午後7時10分であった。われわれ一行は、コーディネーターの内藤教授とご子息英二氏、それに現地通訳の高橋たか子嬢に出迎えられた。

Continental Hotelに着いてその日の第5回目の食事を終えたのが午後9時、日本時間なら翌朝午前5時、ほぼ徹夜をしたことになる。実に長い一日であった。

16日(月) いよいよ活動開始。午前8時全員会議室に集まった。前日の疲れがとれたかどうか心配であったが、一部にはすでにホテルの附近を散歩して来られた方（主として年配の方）もあって、全員元気な顔を見せられた。間もなくストックホルム在住の菊池先生と永山先生が姿をみせ、やや遅れて高橋通訳、つづいてKFのLundberg氏が現れた。簡単な打合せをして、8時半バスに乗込んだ。

都心から郊外へ向ったわれわれのバスは快適に走るが、反対側の都心へ向う道路は3車線ギッシリ詰まっていて動きがとれない様子。反対車線が空いてきた頃は、もうかなり郊外に来ていた。やがて脇道へ入り、しばらく高級住宅（別荘？）地を走って、入江のそばでバスが止まった。入江にはヨットが浮かび、対岸には緑の丘が広がっていて、まるで観光に来たような錯覚をおぼえた。そこにKFの協同組合大学（Vår gård）があった。Advidsson 校長から大学の概略について説明を

受けたのち、Lundberg 氏から「スウェーデンの消費協同組合運動」について講義を聴いた。同氏はKFの国際部門担当の理事として実務に携わるかたわら、時どき講師として協同組合大学へ来ているだけあって、その講義ぶりは堂々として自信にあふれるものであった。

スウェーデンの各種協同組合、KFの組織と活動状況、協同組合運動の展望などについて1時間半ばかりの説明があったのち、質疑に入った。団員から、「KFの合理化、中央集権化と組合員の連帯意識が矛盾するのではないか。」「従業員の経営参加はどうなっているか。」「KF内の労働問題はどうか。」「協同組合運動と政治体制とはどういう関係にあるか。」といった難かしい質問が次つぎと出て、さすがのLundberg氏もタジタジとなる場面があった。それにつけても、こうし難かしい議論のやりとりを適格に通訳された高橋たか子嬢の語学力は見事であった。

昼過ぎにKF本部へ案内され、ストックホルム市街を一望のもとに見渡せる9階の社員食堂でランチをご馳走になった。食後、KF本部内にあるテスト・キッチンを見学し、そこの主任(女性)から活動状況の説明を受けた。そのなかで興味をひいたのは、最近KFが行なっている食生活改善のキャンペーンであった。スウェーデン人は肉類、魚、卵などの脂肪や蛋白質を摂り過ぎて、栄養のバランスが崩れているので、もっとパンやコーンフレークなどの穀類とか野菜を食べるべきだというのである。説明を聴いていると、日本の食生活にピッタリの印象を受けたので、その旨質問したところ、「そのとおり。日本人の食生活は理想的である。われわれはそれを見習おうとしているのである。」との答えが返ってきた。

ふたたびバスに乗り込み、Lundberg氏の案内でこんどはストックホルム郊外にあるKF直営のObs!に向った。Obsとは、スウェーデン語で「注意」という意味だそうである。目的地に着いてまず驚いたのは、その駐車場の広さである。数百台収容できるだけの広さであるが、当日駐車していた車はわずかに数台にすぎなかった。建物は、飛行機の格納庫のようで、お世辞にも立派とはいえない。内部も殺風景で、だだっ広いところに食料品、衣料品、台所用品などの日用品から、電機製品、家具、書籍など、ありとあらゆるものが展示されていた。これがハイパー・マーケットとい

うものである。全農や生協の方がたは早速品定めを始めた。それによると、肉類などごく一部を除き、ほとんどの品物は日本よりかなり高いということであった。

この日は、結局丸一日Lundberg氏に付合っていた。同氏は、当初、8月15日から月末まで夏季休暇をとる予定になっていたが、われわれのために予定をズラせて下さったのである。これまでも全農をはじめ日本の協同組合関係者と馴染が深く、特に親日家であるLundberg氏と一層の親睦を図るべく、視察調査団、全農共催の夕食パーティを「清香園」レストランで開くことにし、同氏を招待した。

食事中、話に花が咲いた。そのなかで、日本人の名前が次つぎに出てきて、その記憶力の良いのには驚かされた。高橋教授が、40年前にストックホルムに来たことがあり、グスターフ・カッセルを訪ね、一般均衡論や購買力平価説について議論した話をされたときは、Lundberg氏も生まれて間もない頃のことであり、驚いたような顔をして高橋教授の話を聴いておられた。

17日(火) 予定より30分程早くシャルホルメンに着き、附近のショッピング街や団地を見学したあと、午前10時に老人ホームを訪問した。そこにはストックホルム市社会福祉局からPosenius女史がわざわざ出張して来ていて、1時間ばかり老人対策について説明を受けたあとで、施設を見学した。当日はちょうどホームのピクニックとかで、老人達はほとんど出払っており、各人の部屋を見ることはできなかったが、読書室、手芸室、診察室などの充実した設備には感心した。ここでは、ご専門の菊池先生が大活躍され、講師の説明でわかりにくいところについていろいろ解説していただいた。

午後は2班に分れ、A班はNKデパート、IC Aストアおよび「サービスの家」を、B班はシャルホルメンの身障者施設をそれぞれ視察した。筆者はA班に同行したので、以下A班についての報告を書くことにする。

NKデパートは、スウェーデン最大の老舗デパートであり、EPA(バラエティ・ストア)、BRA(ハイパー・マーケット)を含めたNKグループの中心的存在でもある。ストックホルムの銀座通りともいえるハンガータンに位置しているが、建物は地上4階、地下1階、照明が暗く、品数も

豊富とはいえず、日本のデパートに比べてかなり見劣りがした。マネージャの Ståhlfors 氏および Hagerman 氏からNKグループの営業状況について説明を聞いた。競争が激しくてかなり苦勞しているようであり、経営効率を高めるため今年度末にスウェーデン第二の大デパート Åhlens と合併することになっているとのことであった。

次に、カーラプランにあるICA（イキャと読む。ロンドンにあるICA＝国際協同組合連盟とは関係ない。）のボランティア・チェーン店を訪問した。ICA本部から Kohls 嬢が派遣されていて、最近の営業状況などの説明を受けたのち、店内を案内していただいた。ICAは最近小売業界において急速に伸びている組織であるが、その原因としては営業時間が長いこと（夜遅くまで営業している。）、対顧客サービスを重視していること、などがあげられよう。

つづいて、ICA店から徒歩2～3分のところにある「サービスの家」を見学した。ここは、日本でいえばゲタ履き住宅といったところで、2階以上は住宅、1階は商店街という建物である。ここには老人が多く住んでいるということであった。

18日（水）この日は朝から2班に分れ、A班は午前中リクスビッゲン（建築労働者による住宅建設協同組合）、午後消費者庁と消費者オンブズマンを、B班は午前中農業者連盟、午後単位農協と農場を、それぞれ視察した。さらに、内藤先生、菊池先生、樋口氏、筆者の4人は他の班と別れてスウェディッシュ・インスティテュートを訪問した。

今回のスウェーデンにおける視察調査のアレンジメントはすべて、スウェーデンの政府機関（外務省関係）であるスウェディッシュ・インスティテュートによるものであった。そのお礼かたがた表敬訪問し、理事の N. Hildeman 氏にお目にかかった。ランチをご馳走になりながらいろいろお話をした。

翌日は朝早くストックホルムを発つことになっており、これまでまったく観光をしていなかったのち、各班とも視察を早目に切りあげ、午後4時過ぎから三々五々スカンセン公園とヴァーサ号博物館を見物に行った。

ストックホルム最後の夜ということで、当地滞在中ずっとお世話になった菊池先生ご夫妻、永山先生、それに高橋嬢をお招きし、夕食を共にした。

菊池先生の国際結婚の話とか、高橋先生が同姓のよしみからか、高橋嬢をえらく気に入られた話などが出て、全員なごやかな歓談のひとつきを過ごした。

(3) コペンハーゲン

19日（木）午前10時15分、コペンハーゲン空港到着。宿舎の Palace ホテルに到着く間もなく、バスでデンマーク消費協同組合（FDB）へ向う。約束の午後1時丁度にFDB本部玄関にすべり込んだとき、情報教育部長の Eriksen 氏は玄関に出迎えておられ、正確な訪問時間をほめられた。直ちに食堂へ通され、デンマーク名物のオープン・サンドウィッチをご馳走になった。そのあと、集会場へ案内され、そこで Eriksen 氏からスライドを交えてFDBの活動状況について説明を受けた。スライドや資料には日本語のものもあり、その用意周到さには驚いた。1時間半にわたる講義を終ってひと息ついたとき、透明のコカコーラが配られた。食品担当者の説明によると、普通のコカコーラには有害な色素が含まれており、それを取り除くためにFDBは長年の研究を積み重ね、ようやく完成したのだそうである。透明のコカコーラは、まさしくコーラの味がした。そのほかにも、FDBが開発した食品について、いろいろ説明を受けた。引き続き、広報担当の Büchert 氏も加わり、政治、経済、社会など広範な問題について、主として質疑応答の形で議論が進められた。

FDB本部のそばに大きな配送センターがあり、その見学を申し入れたが、断わられてしまった。理由は、数カ月前見学者に気をとられた配送センターの従業員が車にはねられ、重傷を負うという事故があったため、労働組合の要求でそれ以後見学禁止になっているとのことである。たまたま、FDB理事長（Eriksen氏はPresidentと呼んでいた。）Andersen氏がわれわれに挨拶したいということで役員会議室（4階）に案内されたが、理事長を待つ間、そのベランダから配送センターの屋根だけ見学（？）した。今年理事長になったばかりの Andersen 氏は、経済大臣を勤めたことがある方と聞いていたが、実際に会ってみると、週末には飛行機で田舎へ帰り畑仕事をしていると自称されるだけあって、非常に親しみを感じる方であった。

20日(金) この日はコペンハーゲンの郊外へ行くことになっており、現地の人は英語をまったく話せないと聞いていたので、東海大学ユーロピアン・センターの服部氏にお願いして、同氏の友人である福居誠二氏に通訳してもらうことにした。

FDBの Eriksen 氏は、前日に続いて今日も案内して下さることになっており、朝8時50分、ホテルまで来ていただいた。バスは30分程走って、Ørholmという地名の住宅地にある FDB 加盟店 Brugsen (スーパーマーケット) の前で止まった。店長の Knudsen 夫妻に出迎えられ、その案内で店内を見学したあと、2階の居室へ招き入れられた。そこは十畳程度の応接間と8畳程度のリビング・ルームで、ごく標準的な家庭と伺ったが、木工家具の本場だけに、家具調度品はすばらしいものがあつた。店長夫妻とも人の良さそうな方で、われわれにジュースやクッキーを勧めて下さり、久し振りに家庭の暖かさを感じることができた。そこを辞して次の目的地へ向ったとき、ご夫妻はバスが見えなくなるまで手を振っておられた。

さらに1時間近く走って、Helsingøe の Brugsen に到着した。ここは昨年の視察調査団も訪問したところである。先程の店と同じ Brugsen という表示があるが、売場面積は数倍の広さであり、レストランまで経営している。衣料品、家庭用品などの品数も豊富で、この地方のデパートといった感じである。自由に見学したあと入口付近でたむろしていたら、そこに伝言板のようなものがあり、紙切れが沢山押ピンでとめてあつた。そのうちの1枚について、一体何を書いてあるのだろうと話合っていたところへ高橋先生が現われ、それは「乳母車を譲って下さい。」と書いてあると翻訳していただいた(高橋先生はデンマーク語もおできになるらしい)。しばらくして、当 Helsingøe 消費協同組合の会長 Jensen 氏と店長 Hansen 氏が来られ、レストランに案内されてランチをご馳走になった。そこでは主として Hansen 氏から営業状況の説明を受けるとともにディスカッションを行なった。Hansen 氏は日本に来たことがあるとのことで、日本語の名刺を頂戴した。会長の Jensen 氏は、本職が農業だそうで、店の営業状況についてはあまり詳しくない様子であつた。そのあと、昨年同様、Jensen 氏から自宅に招待された。ご自宅は、Helsingøe の中心部からバス

で10分位走ったところ、デンマーク最大の湖、Arresø 湖畔の小高い丘の上にあつた。こんどは Jensen 氏の出番である。バスから降りるやいなや、足の不自由なものも厭わず、先頭に立って馬小舎、牛舎、豚舎、牧場の順に案内して回られた。馬5頭(乗馬用)、乳牛35頭、豚30頭、土地ヘクタール(50ヘクタール所有しているが、手が足りないので30ヘクタールを親戚に貸している由)、これだけを息子夫婦と4人で管理している。Eriksen 氏のいうところによると、これがデンマークの典型的な農家だそうである。全農関係の方がたは、この見学は非常に興味深かつたようである。

見学がひととおり終つたところで、自宅に案内された。昨年とはメンバーがすっかり変つている(三堀氏だけは二度目)にもかかわらず、Jensen 夫人は懐かしそうな目でわれわれを迎え、何かからもてなしをしようかとウロウロしていた。手作りのケーキはすでに焼き上つていて、コーヒーや紅茶とともに出された。心のこもつたケーキは、実に美味であつた。大橋夫人は早速 Jensen 夫人と意気投合し、台所を案内してもらつておられた。

帰途、コペンハーゲン市内で FDB 直営の DB、Kvickly (スーパーマーケット形式の百貨店)を見学した。ここは予定に入つていなかったもので、店内を見て回つただけである。財政赤字に悩むデンマーク政府が丁度その翌日から酒税を値上げすると発表していたので、ビールやワインなどをダースで買う人がやたらと眼についた。

この日は、デンマーク人の家庭を2軒訪問し、その暖かい心に触れて、何かほのぼのとした気分になつた。こうした気分になつたのは、筆者一人ではなかつたにちがいない。

21日(土) 全日程のうち自由行動を予定したのは、この日の午前中だけであつた。それを有意義に過ごそうと相談し、お城巡りに衆議一決した。そのためには、午後には予定していた学習会を早朝にやろうということになり、午前8時に Palace ホテルの会議室に集まつた。会議室は、ホテルの名前が示すとおり、宮殿のようなインテリアに満ちており、荘厳な雰囲気であつた。当初1時間くらいで終る予定で学習会を始めたが、「ヨーロッパの流通業界」と題する内藤先生の講義が、1時間余りとなり、その後次つぎと質問が出て、結局2時間半程かかつてしまった。団員諸氏の勉強熱心には、改めて感心させられた。しかし、ここで

勉強したことが今回の視察旅行をより有意義なものにするために役立ったであろうことは、想像に難くない。

学習会が終わってからしばらくして、在デンマーク日本大使館の武田龍夫一等書記官が内藤先生を訪ねて来られた。折角の機会であるから、北欧の権威である武田氏にご無理をお願いして、レストラン「京都」で中華料理の昼食をとりながら北欧の話をしていただいた。食事の最中、武田氏と前日の通訳福居氏とがしきりに顔を見合わせている。そのうちに福居氏が気が付いたとみえて、突然「武田先生ではないですか。」といい出した。聞けば、数年前福居氏が大阪外国語大学の学生であった頃、武田氏は北欧政治史を講義に行っておられた由で、まったく奇遇とのことであった。

午後、Kronborg 城、Fredensborg 城、Fredriksborg 城の順でお城巡りをした。海岸沿いの道路をバスが走って行く途中で、至るところに海水浴場があり、たまたま土曜日ということもあって、海水浴客があふれていた。ストックホルムでもそうであったが、連日30度前後のカンカン照りが続いており、セーターやレインコートばかり持って来て、水着を持って来なかったことが悔まれた。

夜は、武田氏の案内でチボリ公園を散策し、少年鼓笛隊の行進などを見物した。

(4) ハンブルグ

22日(日) 12時15分、ハンブルグ空港到着。Atlantic ホテルに入り昼食を済ませたのは午後3時であった。当日は日曜日でショッピングができず、全員近くの市立美術館へ出かけ、絵を観賞した。ルーベンス、クールベ、モネ、マネ、ルノアール、ゴッゲンなど、結構有名な絵があった。

23日(月) ハンブルグで行動できるのはこの日の午前中だけであるため、当初、GEGを訪問する班とEDEKAを訪問する班に分ける予定であったが、両方とも行きたいという希望が多かったので、訪問時間を繰り上げ、またもや早朝から行動を開始した。

前日のハンブルグ到着後直ちに現地エージェントにドイツ語の通訳を依頼したが、適当な人がいないということで断られたため、急拠、内藤先生の知人で東レ欧州事務所の主任部員岡島三代蔵氏に応援を求めることにした。同氏の案内で、まず

GEGを訪問した。GEGは、「ドイツ消費組合連合会」の略称であるが、現在は「消費組合商事及び生産株式会社」と、その名称が変わっている。広報担当の Bockwold 氏から最近の活動状況について簡単な説明を受けたのち、テスト・キッチンを見学した。同氏は、われわれの訪問を機関誌の記事にするのだと聞いて、さかんに写真を撮り回り、逆にわれわれの方が取材されている感じであった。

つづいて、ハンブルグ郊外にあるEDEKA本部を訪問した。EDEKAは、食料品小売商店の巨大な系統組織であり、西ドイツ流通業界において大きな比重を占めている。副社長 Scheer 氏および管理部長 Danielzik 氏から、西ドイツ流通業界の現状、EDEKAの営業状況などについて説明を受けた。当社の業績はこのところ伸び悩んでいるとのことであるが、西ドイツの流通業界はまだ流動的なようである。

なお、中村氏、山田稲造氏、内藤英二氏の3人は、建築関係の調査をするために、視察調査団から離れ、永山先生に紹介していただいた Neue Heimat を訪問された。

(5) パリ

23日(月) ハンブルグからフランクフルト経由でオルリー空港に着いたのは定刻どおり午後7時5分であったが、団員の約半数のスーツケースが到着しなかったため手間どり、Ambassador ホテルに入ったのは8時半頃であった。さすがにこの日は、全員疲労の色を覆うべくもなかったようである。

24日(火) フランス語の通訳を依頼しておいた河野善彦氏から何の連絡もない。彼は、筆者が数年前出向していた海外経済協力基金で一緒に仕事をした友人で、現在パリ大学に留学中である。フロントに何回も問合せみたが、メッセージもないという。出発間際になって、ようやくメッセージを受取った。それには、「電話をしたが不在なので、後ほど改めて電話する。」と書いてある。万事休す。三堀氏にまたもご無理をお願いすることにして、バスに乗込んだ。セーヌ川沿いを走ること30分、Boulogne の消費協同組合全国連盟(FNCC)本部のそばまで来たとき、当の河野氏が歩道を歩いているのを発見した。彼は、以前内藤先生と一緒にFNCCを訪問しており、場所

を覚えていたのである。

国際部の調査主任 Charbaut 氏に迎えられて、地階の会議室に案内された。昨年の視察調査団がお世話になった Baulier 女史は、9月下旬パリで開かれる I C A大会の準備で忙しく、今回は失礼するとのことであった。Charbaut 氏から一般的な説明を受けたあと、専門調査員の Gascoin 氏からは「フランスにおける消費者運動の発展」について、同じく専門調査員の Quin 氏からは「販売戦略」および「政府の施策」について、それぞれ詳しい説明があった。フランス流通業界では、①消費協同組合のシェアが2.5%（食品に限定すれば4.1%）にすぎない、②独立小売店のシェアが57.6%と圧倒的に大きい、③大資本の進出が消費者運動の発展にとって脅威となっている、④人口の割に商店数が多過ぎるなど、日本と似たような問題を多くかかえていることがわかった。これまで訪問した諸国とは、状況が著しく異なっているように見受けられた。

FNCCでランチを用意するとの連絡を事前に受けていたが、交通公社でも日本料理をすでに予約してあるということで、決を採ったところ日本料理希望者が圧倒的多数を占めたので、FNCCの厚意を謝すとともに、逆に Charbaut 氏と午後案内してもらい予定の秘書嬢を「富士」へ招待した。献立は天ぷらと刺身であったが、刺身については「変わった味がするけど、おいしい。」と言って、全部平らげてくれた。

午後は、MontparnasseにあるFNCC加盟の組合店舗を訪問し、店長と副店長の案内で売場、肉類パッケージ作業場、冷凍室、ケーキ製造作業場などを見学した。全農の方の話では、設備は日本の方が優れているとのことであった。

いくらか時間に余裕ができたので、せめてバスの中からだけでもパリを見物しようということになり、三堀氏のガイドでバスを走らせてもらった。印象に残ったのは、凱旋門、エッフェル塔、ノートルダム寺院くらいであった。それらの観光名所では、日本人の姿がやたらと目についた。パリの新聞は、「今年の夏は日本人にパリを占領された。」と報じていた。

(6) マンチェスター

25日(水) パリのド・ゴール空港を午前9時半に発ち、ロンドン経由でマンチェスター空港に

着いたのは午後1時半であった。空港のそばのレストランで昼食をとり、バスで30分程走って、宿舎の Midland ホテルに3時頃到着した。

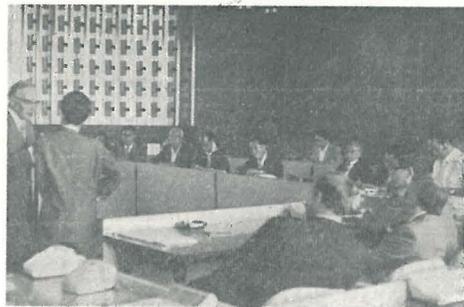
ホテルのフロントに、イギリス協同組合中央会 (Co-operative Union) の Garratt 氏から内藤先生宛に翌日の視察スケジュールを書いた手紙が届いていた。そのなかには、ロッチデール組合の見学予定が含まれておらず、早速団員の方がたの意見を聞いたところ、折角ここまで来たのだから是非見学したいという希望が述べられたので、急速ホテルまで送ってくれたバスに時間延長してもらってロッチデールへ行くことにした。さて、見学することは決まったが、住所がわからず、バスの運転手もホテルのフロントの人達も場所を知らないという。手掛りは、「西欧協同組合の歴史散歩」(家の光協会)に出てくるロッチデール組合の建物の写真だけである。

ロッチデールまではマンチェスターから約20キロ。2メートル近い大男の運転手(名前を Tiny という。)は陽気に車窓から見える景色を説明してくれるが、こちらはロッチデール組合が果たして発見できるかどうか気が気でない。マンチェスター市街を離れて田園地帯に入ったとき、突然赤い頬と煙が眼に飛び込んできた。道路そばの草原が広い範囲にわたって燃えており、消防車が懸命に消火作業をしている。スワツ山火事!と緊張したが、Tinyは「こんなことは毎日だ。」と平然と運転してる。聞けば、2カ月以上一滴の雨も降らず、乾燥しきっていて、ドライバーが投げ棄てるタバコの吸い殻で簡単に着火するという。見渡すかぎり草原は黄色く枯れていて、まるで冬景色を見ているようだった。

ロッチデールに近づくと、意外に大きな町(市)であることがわかり、ますます不安が広がる。町の中心部でバスを停めて、Tinyはそこにいた人(交通指導員一町の案内掛り)にいろいろ尋ねている。そこは中心部からすぐ近くであった。本では修復中と書いてあるが、そのような形跡はまったくなく、写真で見るとよりさらに老朽化が進んでいる。その周囲は、都市再開発とかでほとんど建物がこわされ、多くの作業員が整地していた。ロッチデール組合そのものはますます時代からとり残されていくようであるが、その精神は、これまでの視察を通じてみて、力強く生きつづけていることを特に印象づけられた。



協同組合発祥の地
ロッチデール組合の建物



マンチェスターCWS本部

26日(木) 産業革命の中心だったマンチェスターは、歴史の重みを感じずる町である。最近では都市再開発を進めているとのことで、周辺部は新しい建物が建ちつつあるが、中心部は昔のままである。古い建物のあちらこちらに「To Let」「For Sale」という貼り紙がしてある。この古い町も、変貌の時期が近づいているようである。

イギリス協同組合中央会(Co-operative Union)に広報部長 Garratt 氏を訪ねた。古色蒼然物の2階会議室に案内され、Garratt 氏から「協同組合運動の歴史と中央会の役割」について、経済調査部長 Ainsworth 氏から「協同組合運動の発展」について、協同組合党組織部長 Merry 氏から「協同組合運動の政治的役割」について、それぞれ1時間ずつ説明を聴いた。協同組合運動発祥の地だけあって、本家本元といったプライドは感じられるが、流通革新の波に乗り遅れて業績が伸び悩んでいるためか、現状の説明にもう一つ迫力が感じられなかった。

Garratt 氏を食事に招待したあと、午後は卸売協同組合(CWS)本部を訪問した。CWSの建物は、New Century House 中央会の建物 Holyoake House のすぐ隣りにありながら、まったく対照的に近代的な高層建築である。その16階にある、理事会だけに使うという会議室に案内され、常務理事の Cross 氏、スタッフの Williams 氏、Shaklton 氏などに迎えられた。そこでは、CWSの組織、活動状況、販売戦略などについて説明を受けたあと、質疑応答を行なった。やはり、大資本との競争には相当苦勞しているようである。午後5時12分発ロンドン行きの列車の時間が迫ってきたので、急いでヴィクトリア駅に向った。

27日(金) 午前中、今回の視察調査最後のしめくくりとして、国際協同組合連盟(ICA)を訪問した。広報部長 Ollman 博士と金融部長大

参氏に迎えられ、会議室で Ollman 博士から「ICAの活動状況」と「西欧協同組合運動の直面する諸問題」についての講演を承まわった。協同組合精神を再認識すべき時期にきていることとか、政府の援助を期待すべきではなく、自助努力が必要なこととか、今後は低開発国に協同組合運動を定着させる必要があることとか、いろいろ有益な話を伺うことができた。Ollman 博士の熱弁が続き、予定の2時間を1時間以上超過してしまった。

午後はバスでロンドン市内を観光したが、そのころになって今回の旅行中初めて小雨が降り出した。しかし、バスを降りるときにはすでに雨はあがっていた。

むすび

今回の視察調査団は、ストックホルムやハンブルグで何班かに分かれて行動したように、盛り沢山なスケジュールであった。したがって、以上の報告はすべてを網羅したものではない。また視察内容についても、スペースの関係で、意を尽すことができなかった。これらについては、いずれ詳しく報告機会があると思う。

流通、生協関係に限ってみれば、同じヨーロッパといっても、国によって事情は大きく異なっている。流通革新が急速に進展するなかで、スウェーデンやデンマークのようにその先端を進む協同組合もあれば、イギリスやフランスのようにそれへの対応が遅れ、伸び悩んでいる協同組合もあって、さまざまである。しかし、いずれの国においても、長い歴史をもつ消費協同組合運動は国民生活に深く根を下しており、インフレ傾向にある近年、その運動は見直されつつあるといえる。わが国において、まだ部分的にとどまっている消費者運動が、国全体に定着するのはいつのことであろうか。(視察先一覧表は次号に掲載します)

ご参加の方々 よりのご寄稿

(敬称略、五十音順)



視察団のみなさんと……

障害者福祉施設を訪ねて

日本福祉大学教授 大橋 隆 憲
Takanori Ohashi

このたびの視察調査には、ストックホルムのシャルホルメンの老人ホームと身体障害者施設の視察が準備されていた。そして市当局の係官の案内で、われわれはスウェーデンでの最高級の福祉施設の技術的装備の最先端の状況を見聞することができた訳だ。

しかし、スウェーデンでの福祉施策の原則的な方向は、集中処理方式の方向にあるのではなく、逆に、老人も障害者も、健常者の家庭生活や地域生活の中にとけ込ませ、分散させる方向にあるのだ、ということである。しかもそれは、予算の裏づけが出来次第、逐次、実現して行くよう、努力中であるとのことであった。施設で働く人たちも、分散方式がより人間的であること、より多く経費がかかること、そのために予算の裏づけが不可欠であること、を強調していたのは印象的であった。

私たちは、視察調査団にも、施設側にも、御迷惑であろうとは思ったが、せっきくの機会なので、欲ばって予定外の障害者施設を見て歩いた。第1は、スウェーデンで最も大きく最も立派な精薄施設と云われるカールスランドの養護施設（収容者・精薄児者350名、職員280名、1976年8月現在）、

第2は、トムデボーダの盲学校（1890年創立というから日本最初の京盲に約10年遅れて創設）である。突然の訪問にもかかわらず、両者とも親切な案内をうけ、資料をいただき、その歓待ぶりにおそれ入った次第です。

コペンハーゲンでも、私たちはгентフテの重症精薄児施設（収容精薄児350名、職員は同数の350名）を訪ねた。そしてその雰囲気のあたたかさに関心した。全く動けぬ重症児の部屋を尋ねたが、その子は私たちの来訪を感知し、スイッチを押して電灯を点滅させ、挨拶をしていた。装備はそれほど立派ではないが、雰囲気のあたたかさは、そう簡単に作り出せるものではない。

このあたたかな雰囲気こそ、技術的装備以上の貴重な要素であろう。それからカステルウイの盲啞学校を訪ねたが、休暇中で全く誰もおらず、外観だけを見て帰った。このような調子で障害者福祉施設をみることに努めた。準備不足もあったが、それでも「現地主義」がいささか実現でき、きわめて有益であった。内容的な報告は別の機会にゆづりたいと思う。

視 察 雑 感

岩手県経済農業協同組合連合会生活課長 近 藤 義 彦
Yoshihiko Kondo

○シャルホルメンの福祉局、老人ホーム訪問は専門外であってもいろいろ感じる事ができた。

日本では老人を佳い環境にのの名のもとに遠隔地におくが、ニュータウンの真中に明るい環境で疎外

感をなくし、働けるうちに老後補償の基礎をかためる所謂高度の社会福祉制度の一片をのぞいた様な気がする。しかし「揺りかごから墓場」までの水準にほぼ到達した北欧諸国が「高福祉、高負担」「福祉才出の増大」「官僚主義化による空洞化」の過程を経て社民党政権が大きな修正を迫られた現実も容易に受けとめることができた。

○流通状況の視察先についてはNKデパートが企業合同を進め体質強化を図っている様子、

I C Aの小規模ながら消費者ニーズにそった積極的なチェーン活動の展開、又売場面積、年商、純利益等の採算分岐点を明確にし、E D E K Aサービスを中心にした小売グループE D E K A等まさに協同組合に肉迫しているC O - O P以外のルートについて訪問でき、実態の一部に触れることができたことは非常に参考になった。

○どこにカメラを向けても絵葉画になる程の北欧の景観は心洗われる想い。スウェーデンのK F、デンマークのF D Bともに消費者活動の先端に行く内容には感銘を受けた。特に組合員参加の商品研究室の充実活用、糖分、脂肪のとり過ぎ、蛋白質の均衡摂取を狙いとしてピラミッド型食品摂取模式図によるキャンペーンの実施、又F D Bでは無着色コーラの開発、自然色サラミソーセージ、無着色ソフトドリンク、低カロリーマヨネーズ、シュガーカットのチェインガム等を対象商品の8割程度まで開発メンバー80名によって自己生産体勢をとっているときいた。要は「消費者は信用と栄養を希求する」ことに真正面から取り組み、徹

底的にキャンペーンし、率直に自己生産に移しておる現実。世界の「コココーラ」に対抗して今年6月より開發生産した無着色コーラを感激して試飲した。「批判より代案」を地で行く姿である。

○マンチェスターから車で20分、130年前のロッチデール公正開拓者組合店舗に向った気持はまさに私達協同組合人にとっては聖地エレサレムに赴く信者にも似たり。異常乾燥で発生した草地火災の中をぬけて近代化されたロッチデールに到着、予想した織物業の赤練瓦工場も労働者住宅も様子が一変し、目標の店舗をさがしあてた時は先ず一安心。修復をしたといっても老朽化した住人不在の赤練瓦三階建、入口右側にかすかにC O - O Pの文字をみた時は複雑な感情、創業当時の資料や記念の使用品等がどこに保存されているか、聞くよしもなかった。

その晩マンチェスターのホテルでベットに入る時シーツがちと引掛るので良く見たら二ヶ所程丁寧に補修されていた。私達も笑えないグレート・ブレイクの一面をのぞいた様な気がした。

○海外研修では吾々のおかれている位置を客観的にしかも俯瞰的に意識することと思う。今般の15日間を契機に西独ライフアイゼン思想と協同組合の株式会社化について勉強していきたいと思う。視察に前後して内藤、稲田両先生による各国流通事情を講義して頂いたことは系統的に知る上で大変参考になった。雑感の一部についてのべましたが、観光内容は三堀さんの配慮の内容が想い出として残るでしょう。

貴重 な 体 験

株式会社産業科学研究所社長 中 村 婚
Kon Nakamura

今回の視察調査に参加させて頂き、関係諸先生の御多勞に対し厚く御礼申し上げます。毎日が貴重な体験と問題意識の連続と云う素晴らしい内容でしたが、特に印象深かった事項を下記に列記させて頂きます。

①ストックホルム市の郊外の道は美しい森と湖の線の静寂の中である。O Bという大きい看板はアメリカ的で建物は鉄骨鉄板張。錆止めの赤茶けた色が調和から程遠い。内藤先生が「格納庫の様な簡素な建物」と表現されていたが、軒高も常識以上に高く、この美しい風景の中では、と首をかしげる建築感覚である。店内は生活物資が整然と並

んでいるが、コーヒーが一種類しか無いのを指摘すると、何故そんなに種類が要するのか、清潔さえあれば十分ではないかと答える。むしろ日本は売らんかなの資本主義に踊らされて贅沢すぎるのではないかと云う…成程その後訪ねた各国で売店は日本程多くなかったと思う。そんなに無駄遣いをし、ゴミ、空罐で街を汚す日本に反省をする。

②身障者施設で13.4才の車椅子の少女が同室の男生徒と部屋を離されたと泣いている。同室にすれば妊娠の恐れありませんかとの質問に所員が「いい子が出来た前例があります」と肩すかしの答えを事もなげに云う。性意識の大きな相異。私達は

儒学的すぎるのだろうか。フリーセックスとはこんな国内的な問題であったのかと日本マスコミの誤解を知る。

③高橋先生と脱国したコペンからマルメへの澄み切った美しい青い空と海に溶け込む船旅。マルメの静かな町のたたずまい。バルチック海の波濤に見る西洋史への郷愁。北欧の大自然の中にぼつんと取残された一粒の異郷の空の下での日本人を意識し故郷や友を憶う。

④ハンブルグで在郷軍人に呼止められその親日振りに感動し、小学校の女先生の躰の見事さに感心する。大民衆酒場でドイツの人々の大歓迎に民間

親善使節の様な喜びを味わい、ゾーリングゲンの早朝からの商売熱心と、お釣りが7マルクでなく10マルクである旨不足を申入れると、既に渡したお釣り7マルクも余分に取っておけという信用を大切にドイツ女の心意気に打たれる。

⑤ロンドン生協で弘報部長が、貧しい人々が売って貰えないから自己防衛の手段として出来た生協が、その発祥の理念を忘れ大組織化すると動脈硬化し大商店的な形に変わって行くのを痛烈に批判した根本哲学の熱演は会議の締めくくりにふさはしい頂門の一針であった。

欧州協同組合の印象

全国農業協同組合連合会生活部長 樋口久雄
Hisao Higuchi

ヨーロッパの視察旅行から帰国してから2カ月経った今、旅行中に見聞した様々な事柄を懐しく想い出している。実に快適な旅であった。あの15日間という短い日数の中で、非常に密度の高い視察と調査ができたことは、研究所当局の細心なご配慮の結果であり、言葉でいい尽せない感謝の気持で一杯である。

また、病軀をかえりみず、団長としての労を惜しまなかった内藤英憲先生のご厚意にも深い感謝の気持を捧げたい。

ヨーロッパを歩いて感じたことは、協同組合運動が如何にその国の政治と国民性に影響されているか、ということであった。スウェーデンでは国の社会福祉政策と知的で合理主義的な国民性との結合によって、あの高度な消費組合運動が開いているように思えてならない。また、デンマークの素朴で陽気で農民的な消費組合の姿をヘルシンキ消費組合の店舗の中や組合長エンセン氏の風貌や態度の中に見ることができた。私たち一行を自家に招き文字通り歓待してくれたエンセン氏夫妻の暖い気持を私たちは生涯忘れ得ぬだろうと思う。

西ドイツ、フランスの消費組合は、低迷と苦悩

の姿とみるのは、偏見であろうか。いろいろな話を聞いたのだが、どうしても空しさだけが残ったものである。

イギリスの消費組合は、伝統の重みに耐えながら退勢ばんかいに必死になって頑張っている姿のように思えた。私たち協同組合関係者に最も強烈な印象を与えたのは、ロッチデイル開拓者組合の古ぼけた店舗であった。

あの店舗をみたとき、私はあたかもタイムトンネルを抜けだして130年前の世界に居るような錯覚におそわれたのであった。瓦礫の中の風前の灯のような建物ではあったが、協同組合運動の原点をこの目で確かめることができたことは、何物にも代えがたい喜びであった。

ヨーロッパの協同運動が、どこでも激しい競争にさらされていることが、スウェーデンの流通資本国さの激突を目のあたりにみてつくづく感じたものであった。

私はこの旅行で得た知識と体験を今後の自らの仕事の中に存分に生かしてゆきたいと思っている。

旅行中に見たヨーロッパの風物の美しさは未だ私の胸に去来している。

お知らせ

スウェーデン語講習会

8週間単位、年3回開催、初心者対象、週2回出席、午後6時からと午後7時30分から、日本人とスウェーデン人ベテラン講師が指導、詳細は当研究所へ電話を

(212-4007・212-1447)